宗像

毎月一日発行
定価一年送共250円
発行所
宗像大社社務所
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

宗像大社御用達
神輿祭具装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

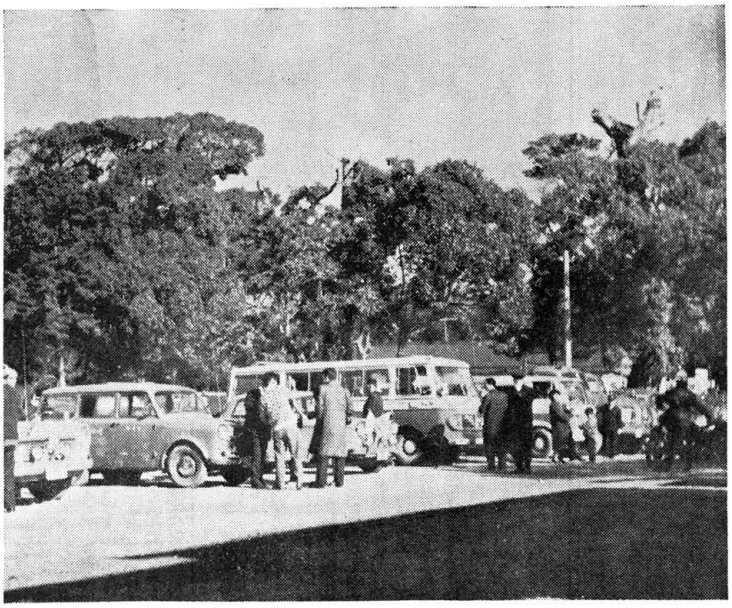
車・車・車・・・・
正月祭空前の人出

みぞれに明けた元旦、気づかわれた空模様を仰いでいた頃には、もう勝負はついていた。未明までに東参道入口の警官詰所で数えた自動車の数はすでに五千台を超えていた。宗像大社の初詣では殆んどが自家用車や、営業車の交通安全祈願者である。少々の悪天候は問題にならない。

大晦日の午後十一時三十分、新年の第一回交通安全祈願祭斎行。数時間前から押しかけて待機していた祈願者が、百名ずつ区切って一斉に昇殿する。あとはひっきりなしに太鼓の音がひびく。前庭の両側にはかがり火が明々と燃え立って祈願の順番を待つ人々が囲りに溢れて手をかざしている。

夜明けに一息つくまで釣川の県道には不夜城のように自動車の列が続いて夜空をいろどっていた。まさに一年一度の賑わいである。自動車は神門の前、特に神池埋立ての場所に約百台、東参道両側に数百台、正面県道脇広場のあたり等、身動きも出来ない程、駐車していた。終日の祈願数も昨年の三割増しと見られた。

大よその自動車台数の統計は、七日迄の間に一万六千八百五十台を数えた。昨年の九千三百台に較べると雲泥の差である。無論戦後最高の数字である。



元旦の神社日誌に「まことに御神徳の炳乎たるを目のあたりにす」とあるのが万感を物語っている。市中新聞の論調でも「雨にたたられた初詣で」と題して、それでも参拝者数は全国的には増加したように書いているが、「交通安全のお札は飛ぶように出た」（十日付西日本新聞）等と特別扱いにしている。

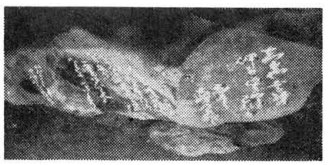
去年の暮、各新聞がでかでかと「初詣で」の広告を掲載した。全六段くらいの広告である。〃三社詣で〃〃五社詣で〃をはじめ、西鉄営業所関係の初詣でコースが県下くまなく示されていた。が、しかし、妙なことに宗像大社だけは全然その中に入っていなかった。不審に思われたけれども、ガタガタ騒ぐのも大人気ないのでそのままにして置いた。ところがそんな杞憂は吹飛んでしまったのである。結果は初詣で広告によって影響されてはいなかった。まことに「御神徳の炳乎たるを目のあたりに」したのであった。（写真元旦の社頭）

万葉歌碑の建設進む

去年の春から募金にとりかかった万葉歌碑の建設が着々と進んでいる。これは、宗像郡に関係ある万葉歌二首を石に彫刻して宗像大社境内に奉納しようというもので、石材は宗像町吉武の山中から約十トンの玄武岩が発見せられ、すでに一月六日から彫刻にかかり十三日には彫刻を完了している。施工は福岡の山野石材店。

募金状況は大体良好で、除幕式までの経費の見通しがついた。発起人と実行委員諸氏の献身的な努力のたまものである。

巨岩の据付場所は東参道入口のロータリーの一部で、前に立って眺めるための踏台石も田島の嶺太郎氏（町会議員）の好意により奉納されている。



写真は据付前の万葉歌碑

揮毫は久保宮司、勢いのある雄渾な文字が岩面一杯に躍動している。あとは据付造園工事を残すのみで、二月十一日、完成除幕式が行われる見込みである。

○ちはやぶる　鐘の岬を　過ぎぬとも　われは忘れじ　志賀のすめ神

○大汝　少彦名の　神こそは　名付けそめけめ　名のみを　名児山と負ひて　わが恋の　千重の一重も　慰めなくに

（大伴坂上郎女）

宗像郡にゆかり深い右の古代人のやさしい調べが観賞者の心を打つ日も真近い。

新年名簿代募金の御礼

旧臘、新年を期して全国的な宗像会員の名簿作成を思い立ち、会員の皆様にお願い致しました処、予想外の寄金を頂き職員一同驚喜しております。

各地宗像会からの多額の寄金と、個人〳〵のお志によって総計八万円余となりました。

「一年間黙って発行を続けた実績が認められたね」

職員にとっても感無量でございます。何も金の多寡で物事をはかる訳ではありませんが、打てば響く全国会員の真心は何にも換え難い喜びでした。

早速この寄金で名簿代の支払いを済ませ、余分の資金で宛名印刷機を購入することにいたしました。これで毎月徹夜々々で千五百通の帯封を書いていた手間が皆様のお蔭ではぶけるようになるわけです。

折角の皆様の御志を無にしないように、出来るだけ活用して、今後も立派な「宗像」の刊行を続けたいと思っております。全国の皆さん、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

（編輯部）

論説　濁流

新春のどかな風景を予想して郷土の神詣で親戚訪問に出かけた。町役場の入口は国旗ではなく自由労組の赤旗が林立していた。越年資金獲得の斗争が例年の如く歳末の年中行事の一課題として、派手な坐り込みが行われているとは聞いたが、鉢巻と赤旗がそのまゝ越年しているとは思わなかったので少々奇異な感じである。

民主的な話合いという名のもとに多勢を恃む怒号罵声は、町当局の退避戦術となり正月になっても町長はじめ首脳部は夫々分散避難して帰って来ない。べた〳〵と貼られた文字、高声に撒かれる宣伝文句、貧之と悲運は町政よろしきを得ぬために生れたかの如く聞える。要求した金さえ握ればよいのだ、他人の迷惑や不信は知らぬ態度に見える。食うため生きるために悲涙を払って叫ぶ已むを得ぬ正義の斗争と自信しているのであろうか。

俺の家は二世帯だ、妻は離婚している、行先がないから都合で俺の家に置いてやっているのだと、すごまれた町吏員は苦笑の外はあるまい。まさにナンセンスだ。

子供といっしょに難意を祝いたいなどこの場合警沢だ、帰ってみろ、組合は除名だとおどされて中年婦人の組合員は坐り込みの炊事を続けながら涙をぬぐった。二三の指導者が多数の組合員を睨みながら、寅年の年頭を猛虎の形相で狂奔している。

いかなる労働団体でもその指導的立場にある者は、悉く無知無反省な人ばかりではない。組織の中にある者の個人的な反省や意見は抹殺され、大勢の奔流に無恥無謀を装って自己を委ねている。折々それが暴力となり破壊となって思わぬ方向に激突し、悔恨の及ばない事態に至る場合もある。然し生きるために組織は容易に脱し得ない。しかし義理や愛情に不感症となった怒号の底に人間の本質的な幸福が見出されるとは考えまい。

高度の地位にある指導者は労組の末端が演ずる斗争を、適時煽動しつゝ、別の目的のために冷静に見つめているのではないか、小ボス達の行き過ぎもこれを是認し、それを正当化する理論的教示を与えているかに聞く。

こうした年々繰りかえされる斗争状態は、その組合に已むを得ぬ事由があって避けられないものとしても、決して一郷一村或は一国の繁栄を進め多数の幸福を増すことではない。時代的要請だと片付けてはならない。これが累積されてゆく内に人間性の良き面が破壊され、相互不信の憎悪は痛ましい結果を招来する危険さえ考えられる。古語に曰く、源清からずんば末治まらずと。源はよいのか。政治の源泉に不信不調はないのか。末端の混乱のみを注視しても、解決し得ないものが源に発しているのではないか。

四囲不安定の情勢の中に新しい年を迎えた。信頼互助の軌道の上に民族の真の繁栄と平和の方途を考える慎重な運転を指導者に望みたい。

阿蒙少言

禍福はあざなえる縄の如し、人間万事塞翁の馬とは古いが、禍福いずれにせよ新しい年の暦も亦過ぎてゆく、塞翁の馬も歩まねばならない、急いで騎虎の勢になってもよくないし、ためらって守株の愚に終っても笑止の沙汰、鈍根聖賢の教は読み難い○世の中で一番頼みに思えたのは女房だった。一番邪魔になったのも女房だったと老大家の述懐、邪魔者があったが為に大きな躓きがなくてすんだとの意味に解釈したい○「あなたは良い所に来ましたヨこの島はいくらのんきに歩いても決して交通事故はありませんからネ」離島通いの渡船の中、聴くは他郷から赴任したらしい若い女教師、語るは村の老吏員、尤も自動車一台もない島に交通事故は起るまいが、日々報道される深刻な犠牲に物質文明の発達を鋭く批判し、平和な島の安らぎを自讃する老吏員の顔が微笑ましい○苦楽を共にすると云う言葉が戦前の軍隊などでよく聞いたが、親和協心に必須の心構え、然し苦は共にするが、楽を共にしない場合には家庭も職場も和気靄々の姿は望まれなくなる。指導の地位に在る者の最も考慮を要することは、苦を共にするより楽を共にすることに重きをおくべきだ、と或る先達が訓えてくれた、この心得は容易であってなかなか容易でないと反省してみる○子供の不良化防止が刻下の重要課題として論じられている、子供は解放感を求めて家出する、家出した愛児を毎夜案じつづけて門扉を放って待ちわびる母の胸、そこに愛の珠玉が閃光と輝く。暗夜を帰る子の目標は母の胸である。窮極子供の解放感は母の胸にある○寒気の中青少年の剣道のかけ声が響いてくる、指導者の熱意が寒暖を超えて若木を育ててゆく（白雲）

第十回宗像大社献詠歌会詠草
37、1、7於社務所（詠草到着順）

神湊　隣船俊
○辺津の宮神風仰ぐ初詣幾千代かけて年を寿ぐ
田島　神戸　幸夫
○あらたまの年の始めを寿ぎて心ひきしめ屠蘇を重ねつ
戸畑　田中ハツセ
○人並に宝石買ひてはめもせず折々見ては一人ほゝえむ
香椎　織田　橡雨
○千引きなすいはほもゆかし宗像のみやゐにたてる歌のいしぶみ
田島　滝口主米蔵
○初春の光のどけき御社に恵方詣での車にぎはふ
熊本　吉田　寧雄
○冬枯れとなりたる畑のかなたには雪をいただく阿蘇遠く見ゆ
勝浦　永島　文子
○初春の島うららかに日はさして磯見小船の櫓の光りをり
田島　宇都宮　淳
○神域の姿うるはし松が枝に白雪つもれる宗像の春
宮田　北原きみよ
○母の手をとりて詣づる石段のきざはし白く山茶花の散る
東京　永島　濶
○夕暮れて初島影の沈む頃灯り映えゆく熱海湯の街
京都　鈴木日出年
○玄海の冬の波頭目にみつゝ言葉絶えたる君に酒つぐ
戸畑　伊規須ゆき
○靄に泛きし彦島は陸に近づきてここの埋立四十年過ぐ
（製鉄戸畑工場）
勝浦　永島　計七
○新調の背広に寄り添ふ新妻のハイヒール軽し初詣の朝
深田　中野　節子
○未亡人君の店より初めてのカレンダー届き厨明るし
戸畑　山磨　昌子
○成年式をむかふる娘のすこやかに背丈はかりて晴着縫ひつぐ
吉武　福原　正喜
○方位感すでに無くせし吾れを乗せ雪積む山峡汽車進み行く
吉武　福原　リノ
○たまたまの家居は忙し掃除さへ終へぬに昼のサイレンの鳴る
香椎　桜井　秀
○寒々と橡の枯木のそそり立ち風吹けば今朝は鴨の群鳴く
香椎　桜井　ツ子
○雪しぐれしぐるる街の雑沓に迎春の小さき注連さげて持つ
宮田　片山　朔子
○火にかざすをためらひつゝも土に泌む太き手のべぬ春のまどゐに
津屋崎　麦野　時雄
○羽田たちて雲海を行く飛行機の窓にとらへし富士の頂
吉武　立石　昇
○戦後十余年右に左に揺れながらあはただしくも年の過ぎゆく
吉武　立石ろせの
○師走には珍らしき今日の暖かさ干柿の影カーテンに揺るゝ
宮田　片山　一
○みはるかす緑襞なす遠山の煙は大師の在す寺のあたりか
宮田　中村　幸
○久々に抱きし孫は清らかな頬すりよせて喜びくるゝ
田島　小野　迪夫
○あられ降るあしたの道をおらびつゝ寒稽古の子ら馳け行く声す
田島　久保　輝雄
○すめらぎの国をことほぐ神まつり菊の紋章あざやかに照る
田島　葦津　嘉之
○あらたまの年の初めより徹夜をし祝詞の声もたえだえになりつ
福岡　林　まつえ
○古稀といふ年を迎へて実感はいまだわかねど人につげたき
田島　難波江通泰
○ももづたふつぬがの国の教へ親雪にうもるゝ深山におはしぬ
赤間　森　政教
○上のこども二人それ〴〵妻を持ちぬかくて迎へし還暦の春
遠賀　早川藤九郎
○雁の群玄界灘の南をさし朝の時雨の雲間をわたる
吉武　高山徳七郎
○よきことのあるが如くにこの年の無礙の光びそかに燃やす
沖島　前田裔之助
○荒浪は生きものゝごとく変化あり高々飛びて去りて又飛ぶ
神奈川　出光萬兵衛
○虎と見て石に立つ矢の虎の巻しかととらへて進む寅年

成人祭斎行

十五日、今年も盛大に成人祭が行われた。午前九時半、宗像大社中津宮に参集した若人は三十数名、同じく辺津宮に参集した若人は一一九名、厳粛な奉告祭典を終って中津宮では宮司の祝辞を、辺津宮では権宮司の祝辞を受けた後、それぞれ祝典場に向った。

次に祝辞の抜粋をしるす

〔久保宮司祝辞〕

おめでとう。心からお祝い申し上げます。さて、皆さんは二十才になられた。戦時中、日本中がさまざまな困難のうちに生活をしている最中に皆さんは生れた。今こうして元気な顔をしている皆さんを育てるために、皆さんのお母さん方がどんなに御苦労なさったかを考えて下さい。平常の時ではなく、あの欠乏困苦の時代を通ってこれ迄に皆さんを育て上げられた御両親の恩は何ものにも代え難い尊いものです。ところで、その御両親もその又御両親の育てられた結果なのであって、ずっと辿ると悠久の昔から繰り返されて来ていることです。こう考えてくると、君達は二十年前に生れたのではありません。悠久の昔に生れていたことになります。血も魂も受けついで現在の君達があるからです。根源を求めるならば、君達の最初の御祖先は中津宮さまということになります。何千年来、君達の御祖先はこのお宮を大切にお守りして来た。島の平和は中津宮さまを大切にお祭りできることにあったからです。皆さんも御先祖さまに負けないように、正しい人の道を歩いて立派な国民になって下さるよう希望いたします。

（写真は辺津宮の成人奉告祭）

宗像大社宝物紹介（その十三）

①変形鳥文縁方格規矩鏡

径二七・一糎一面白緑色を呈する良質の白銅鏡で、完形を保っている。

縁厚六粍・面反り四粍・鍾高一・七糎・鍾径三・九糎、鏡背の図文は、平縁の外区に流雲文又は唐草文の変形と思われる鳥文と鋸歯文とをめぐらし、内区は段落ちし、外方の直行櫛歯文帯にはじまり、蒲鉾形の擬銘帯がこれにつづき、八個の円座乳を型の如く置いた間に、線表出の渦文化した図象を配している。

この図象は渦文化した虎と推定される動物を相対して配置したものである。

其他の図象は渦文化した鳥、盤竜とを線表出している。

この鏡は多数の鏡のうち一番大きく精巧品で文様の表現と手法の鮮明なことは、学者間の話題になったこともあり或る学者は渡来鏡でなく、当時の最高技術者がつくった日本製であると言明された。

いづれにしても当時代の人々が盛大なお祭を厳修して、神様に奉献したものであります。

宗像大社社務日誌抄

十二月二三日　黒木権禰宜中津宮詰の為引越渡海。

十二月二四日　社前神池工事の為内山緑地会社員来社作業開始。

十二月二六日　地元町議田中富樹氏外来社、宮司応接懇談。万葉歌碑建設の件にて永島計七、立石昇両氏来社打合せ

十二月二八日　宗像町中央中学校地鎮祭、職員二名出張。神池工事本日終了。婦人会砂利ならし奉仕

十二月三十日　地元総代正月祭準備の奉仕

十二月三一日　午後四時大祓式、続いて除夜祭斎行。

一月一日　地主祭午前三時、元旦祭午前七時全員奉仕。授与所加勢地元総代。戦後最大の車数なり

一月三日　玄海町神湊地区お日待祭十六件、職員一名出張奉仕。

一月四日　祈願車数の激増により神門前の一部に応急砂利を入れる。

地島の国旗掲揚運動

一月五日、宗像大社難波江（なばえ）講師が地島を訪れた。当夜は泊と白浜の住民が小学校に集り、難波江講師の講話を聞いた。講話の内容は我国近世の歴史と日本人の精神の在り方についてであったが、たまたまその会合の席上で国家意識の高揚のために光輝ある国旗を掲揚しようという提案が持ち上った。絶えて久しい外部の空気が狭い島民の自覚を促したものといえよう。

難波江講師は早速これが調達を引受けて帰社した。過日注文の国旗が十旒社務所に届いた。そして久保宮司の発案によって、これを大社からの贈り物とすることに決定し、早速地島の加藤小学校長宛送達されたのである。

講師は地島を訪問するにあたって御神酒をお土産に持参した。新年早々大社から届けられた、といって地島の人々に大層喜んでいただいた。と講師の報告があった。

本当に押し頂いていた、という。

少しずつ、少しずつではあるが大社の活動は影響を及ぼしつつある。島内、という地域性からしても、純朴な島の人々に対して大社としてもできるだけのことをして差し上げたいと思っている。

時代思潮の行き過ぎは識者の批判を浴びつつある。この時にあたって農漁村の人々、我国の根幹部を形成するこれらの人々も本来のものに目覚めつつあることは喜ばしい。事は国旗十旒に過ぎないが、その裏付けとなっている国民意識の向上に注目したい。

二月祭事表

三日　節分祭　午前十時

正月も終り、冬籠りの季節が過ぎて、いよいよ実際の仕事を始めるに当って厄除けのお抜いをする行事。各家庭に於ても福豆を撒いて「鬼は外、福は内」と唱える。

五日　旧正月祭　午前十時

旧暦で正月を祝うことにも新年をつゝしみ迎える重要な意義がある。旧暦は特に農耕、漁業等と関係が深い。

十一日　建国祭　午前十一時

もとの紀元節祭。わが国の建国の起源を想起し、国民のつとめと幸福を考える日。

宗像談話室　トイレの鏡

去年の暮、職員が社用で上京した。普段は田島の在でのんびりと田園の生活をしていた者が、東京でも最尖端を行く近代ホテルに宿泊したのが運の尽きであった。

自動車を降りてホテルに入ろうとした。「向うは見通しだな」と思う間もなくドスンとぶつかった。磨きたての一枚ガラスのドアが慌てた彼氏の顔を映していた。

☆食堂

いくら田舎侍でも食わずにはいられない。仕方がないから、外人が沢山食事をしている食堂に行った。おもむろに献立表を手にとる。すかさずボーイが傍に来る「何にいたしましょうか」「うむ」と献立表に目を通した。全部横文字である。多少は読めるが、料理の名称など知ろう筈がない。味噌汁、沢庵などいう馴染み深いものは書いてない。やむを得ず「これ」と指さした。

運ばれて来たのは訳の分らぬジュースである。「次は？」とせき立てるボーイに、今度こそは、と指さした。「これにしよう」運ばれてきたのは又もやジュースである。万事休す。

見かねたボーイが「それでは見つくろって来ましょう」といってビフテキとポーテトを持って来た。その食べ方が又難しい。

「箸はないかね」

「ありません」

それでもどうやら食事が終った。

こげな苦労するものはいかんばい、という訳で、それからは「軽食を」

ということにした。トーストと玉子の目玉焼き、コーヒー、果物が運ばれる。これならば何とかこなせる。時々「ポーテト」をたべる。しかし、箸が恋しい。沢庵と味噌汁が恋しい。それが何処にも無い。情ないやら口惜しいやら。

☆風呂

夕刻風呂に案内された。それが洋式である。湯と水の栓をひねって適温にして入るのだということはわかった。そろそろと足を入れた。ところが洋式バスは縁が丸い。あっ、と思う間もなくひっくり返った。湯を呑んだらしい。びっくりして起き上ろうとした。深さ一尺程の湯槽は白い瀬戸物だからつると辷る。やや暫く、あっちへつるりこっちへつるりと七転八倒しているうちに、どうやら落着いた。中には他に誰もいないから誰にも見られてはいない。体裁なんか悪くない。「落着け落着け」と自身にいい聞かせ乍ら「はて、東京の手拭には紐がついとるな」と思った。ギュッとしぼってみて驚いた。何とそれは自分の褌であった。

☆トイレ

便所が洋式便所で、例の腰かけ式である。そんなもので用を足したことはない。生理作用は一刻の猶予も許さない。切羽つまって全部脱いで上に乗っかった。純日本式の姿勢となったのである。洋式便所は大小別々に用を足すべきシステムである。

ところが日本人は両用同時に足す習慣がある。前の用を足す時は下に下げる。後の用を足す時は前の方に出す。これを交互に繰返した。忙しい。時々同時に出る。危機一発！外に洩らさずに済んだ。ホッとして前方を見た。鏡がかかっている。見馴れたような見馴れないようなものが映っている。ああせがれか、と思った時に急に懐しくなった。そこで心の余裕が出た。

さて翌日からは鏡にハンカチをかけて用を足すことにした、そうである。少し研究をした結果、前の方を手で押し下げて両用を同時に足すことが可能になった。「大した進歩だ」独りで悦に入った顔をした、らしいが誰もこの顔を見た者がいないから一寸想像がつきかねる。

軽食ばかり続いて、在京中は空腹感に悩まされた。ポテートは消化がいいから尚更である。困った時はトイレにとんで行って手洗い用の水を手ですくって何杯も飲んだ。「つとめとは言い乍ら、東京出張はつらいなあ」と思った、という。その時にトイレの鏡が彼氏の情無い顔を映していた。

（こんなことを沢山の日本人が経験していると思います）

× ×

鐘岩岬（かねのみさき）(二)

山下半可作　深田無庵画

「初冠り」二

鳥居前の下乗札の所で一行は馬を下りて一と息入れた。屋にはまだ間があろうか、馬から降りると急に初秋の日射しが強く感じられる。神湊の方向に夏雲のような白い雲の浮んでいるのを見遥かして秀秋はその秀麗な顔をあげた。

ふと、鳥居脇のあたりがざわめいた。どこかの姫君でもあろうか、女物の網代駕籠―あじろかご、多くは出家の用、ここでは漆で彩色した網代駕籠―が通りかかった。軽輩の武士二三名のほかに侍女らしい女房が四人程つき従っている。この辺では珍らしい女房駕籠なので、じっと見ていると、ほんの少し物見の庇があいて匂うばかりの美しい少女の顔がちらりと見えた。外を見廻していたのであろうその姫君の目が一瞬秀秋の目と触れ合った。と、物見の庇が締った。あたかも何かの衝撃でも受けたかのように――。

若党頭の坂本源三が傍へ寄って来て呟いた。

「若君、宗像殿の姫君と見えまするな」

「どうしてそれがわかる」

驚いて秀秋が聞くと

「は、駕籠の屋根に楢の葉の紋所がありましたるによって」

「ああそうか、そういえば宗像殿の紋所は楢の葉であったな」

「さては、若君は紋所を見られたのでは無うて、姫君の――」

そこまでいうと源三は口をつぐんだ。若君の白い頬に薄紅を刷いたように、急に血の気のさしたのを見たからである。

「源三、美しい人であったな」

「はい、初冠りの御参詣に出合いましたるは何かの御縁でもありましようかな」

源三は若君の顔を窺いながら、ちょっと反応を試してみるようにつぶやいた。

源三は秀秋の幼時からの附き人であったので、この主従の間に心のわだかまりは何もない。

源三は、こう呟きながら、若君もそろそろ身を固める準備をなされたがよい、と思った。

源三のいうことを聞いているのかいないのか、網代駕籠のあとを見送ったその目を川をへだてた鎮国寺の山に転ずると、秀秋は口の中で何ごとかをいった。

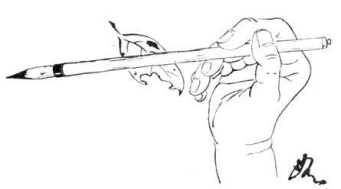
「若君、何か仰せられましたか」

「うむ」

こういうなり、秀秋は腰の矢立を抜くと懐紙を取り出してさらさらとしたためた。

「源三、これを届けてはくれぬか、どうであろうな、こんなことは」

さし出された懐紙には一首の和歌がしたためられている。



ならの葉のかげにいこひて啼く鹿を道ゆくひとはいかに見るらむ

この歌をじっと読みくだしていたが

「は、では委細承知仕りました」

一切を呑み込んだ源三は、それをていねいに懐に入れると、後の一行を振り返り、野太い声で号令をかけた。

「皆の者、隊伍を組め、これより宗像のお社に参る。若君の御参詣にそそうがあってはならぬ。あれが志賀の者共かと人が見ておる、よいか」

面魂のいかつい一行三十名の者は、身づくろいも手早く整列した。

×

神前に初冠りの奉告祭を済ませると、秀秋はその足で大宮司の館に挨拶に向った。緑濃い神苑をあとにして南へ約十丁、田島村片脇城の山裾に宗像五万石の領主である大宮司の邸宅がある。

累代の好誼を続けてきた阿曇家の係人、しかも名島城主の子でもあるので、大宮司興氏は自身で玄関に出迎えた。

「よう参られた。おう、立派な若者じゃの、先ずは上がられよ」

と先になって案内に立った。頭こそ白髪になっているが、興氏はようやく五十の坂を越えたばかりと見えた。顔色はふだんでも赤く焼けている。余程酒豪とのことであった。さまで大男というのではないが、さすがに一国のあるじとしての威厳がその物腰に現われていた。爪先を外側に開いて、いつも口をきゅっと引き結んで立っている風貌にも一種の風格が溢れている。奥の客殿に通ると「阿曇どのから聞き及んではいたが、大きうなられたな、立派じゃ、さぞかし小早川どのも喜んでおられよう。まだ子供じゃと思うとったに、早いものじゃ」

興氏は秀秋と向い合うと目を細めた。

その時、

「ごめんくださりませ」

絹ずれの音がして明り障子が開くと、いかにもあどけない女性がその母親に付添われてはいって来た。そろそろ成熟しかけて来た女体を包んでいるその衣裳のまるみを眩しそうに見ていた秀秋が眉をあげると、これまた丁寧に頭を下げていた女性もその顔をあげた。視線がちら、と合った。あつ、と思ったのは二人同時であった。先程、鳥居脇で下馬した時に見た女房駕籠の女性が、いま秀秋の目の前にいたのだから無理もない。しかし、その一瞬の出来事は大宮司にもわからぬ程の微妙な変化であった。

「むすめの伽羅じゃ、十四才になるかの」

興氏はそう紹介すると、二人を等分に見較べた。（つづく）

正月に魁けて 寒稽古に奮む子ら

宗像大社剣道部では、正月に魁けて旧冬二十四日から三十日迄、毎朝七時から八時迄寒稽古を行った。参加者四十数名、遠い所の少年は五粁も離れた所から通うため、六時には家を出たであろう。丁度寒波襲来の頃で、一週間のうち半分は雪とみぞれの日であった。それでも休んだ少年はいなかった。毎朝、気合いをかけながら走って来る少年たちに励まされて、指導者の側にも熱が入った。

どんなに寒くても冷たい水で雑巾がけをしてから稽古にはいる。小さい子は六才から大きい子は中学三年生までいる者が全員一致して掃除に励む姿に、見学の父兄から嘆声が洩れた。

寒いけれども稽古をすれば暖かい。終って面を脱いだ少年たちの頭からは湯気が立った。続いて冷たい板の間に端坐して日課の詩吟と朗詠がうたわれる。

一週間の寒行をなしとげた少年たちの顔には一つの自信感のようなものが現われていた。

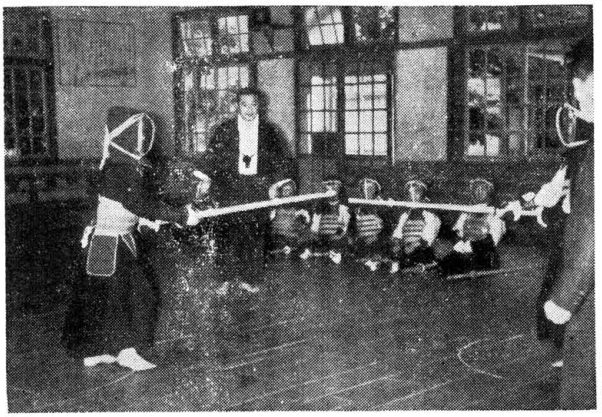
三十日の納会には全員の勝ち抜き試合が行われた。元気一杯道場せましと暴れ廻る姿は参観の父兄たちに喜ばれた。

納会のあとで皆勤賞を貰い、試合の賞状と賞品を（全員が）貰った少年たちは寒色満面、神社の心づくしの「おしるこ」を大丼に何杯もお代りをして御機嫌であった。寒稽古を仕遂げて正月を迎えることは子供心にも何等かの影響があったことと思われる。

なお当日の試合成績左の通り

○一位　六人抜　安部常美
○二位　四人抜　永島勝美
○〃　〃　早川高敏
○三位　三人抜　稗田茂人
○四位　二人抜　鎌出信一
○〃　〃　深田和人

（写真は勝抜き試合）



たより

新しい年が産れますお目出度う

一根産萬人　容神無同一

政教不可及　陰陽配合妙

人間如何に生き如何に死んで行くかという事よりも、寧ろ親は何故に産み、子は何の為に産れて来たかと云う事の方が一層根本的問題では無いでしょうか？

昭和三十七年元旦

福岡市小姓町　高橋昇

明治二十一年十一月三日生

二、咸宜園について

明治維新前後、咸宜園の学風をしたって、或は三日或は五日と、山野を越えて九州各藩から書物を背負って儕の日に、或はまた炎天の夏にもめげず、豊後の国日田まで足を運ぶ若人が多かったのである。大正十三年一月総理大臣になった清浦奎吾氏もその中の一人である。彼は少年の頃、熊本より笈を負って日田に行き、淡窓の門に学び、後、埼玉県の下級官吏から身を起こし、藩閥のひどかった明治大正時代よく政府の要職につき、遂に首相になったが、――る。

若き日の咸宜園生活がどれ程人生行路に役立ったか分らないと述懐しているのである。

その学問と生活を通しての人間育成の学風は、当時、志を立てた若人のあこがれの学園であったわけである。

青雲の志に笈を負うて　その二

（宗像人の心意気）

越智汎愛

その咸宜園とは、豊後日田の漢学者広瀬淡窓によって約一五〇年前に開かれ、青村、林外等道等著名の学者が多数居たにも拘らず――それらの門前を素通りされたのであろうかと思われる。

その学問と生活を通しての人間形成を熱望して。

宗像町東郷出身の伊藤尾四郎先生が編輯された「福岡県史資料第一輯」に県人の咸宜園遊学者名簿の項で拾いあげてみると、宗像郡人では左記の如く十三名の氏名が見えるのである。

これらの人の事績や、その子孫或る宗像少年が夜明村A宿の一室で口誦んだ淡窓先生の諸生に示された詩の心を心として――と私はひそかに念するのである。

三、明治以後の宗像少年抄

明治以後、わが宗像少年が咸宜園遊学少年に劣らず、遠大な希望に燃ゆる志を抱いて、東京を始め各地の学校に学び、中央に地方にそれぞれ活躍せられた。又現に活躍して居られる事とを思い合わせてみると転々感慨に堪えないものがある。

今日の宗像少年も、江戸時代や明治の宗像少年に劣らず、高遠な志を立てて、それぞれの道に進んで行くことであろう――嚮の夜

入門年月日	氏名	
文政三、三、一八	大穂町中西籠坂	林　修元
全　全	野坂村	有吉禎輔
天保二、九、一〇	鱗崎	大村元瑞
全　六、二、	四津屋崎	児玉太仲
全　二、二、二	赤間村	五十君春桂
全　一五、二、一五	本木村	文久三、五、二六
弘化三、七、二八	河東村	野田慶蔭
全　全	野坂村	有吉禎輔
全　六、二、	四津屋崎	児玉太仲
全　二、二、二	赤間村	五十君春桂
全　七、一、一七	大穂町中西磯之助	柳泰治郎
文久三、五、二六	復郷	元治元、五、二一

（慶応一明治三の年に至る間は宗像大社の手水鉢を新調したいまつりが営まれています。」

ここで一と息ついて永島氏はお茶話し続けた。

「そんなことまでして事をおさめ、苦労を重ねながら相携えて来た両郷の歴史性というものを等閑視出来ません。私が勝浦の村長をしていた昭和三十年、町村合併の問題が起りました。第一案第二案があって、勝浦が今の玄海町にかたるか津屋崎にかたるかが論議されました。郡の案としては玄海町に包含する案が有力でした。私としても郡の案に反対であった訳ではありません。しかし村長としての私には、先程もお話ししたように、その昔は大層な争いをした歴史を持ち、その後お互いに譲り合い助け合ってここまで来たことを考え、また水利交通等の事をあれこれ考えた末津屋崎に合併したのです。今は勿論漁場争いなどは昔の語り草で、そんなことは何の懸念もありません。

合併していたならば、漁業水利交通などの点でいろいろと問題が起っていたでしょう。私も八職五十年で退職し、今は余生を悠々と送っているわけですが、先年病にたおれ、既に覚悟をしていたものの、いま毎日のように海岸を散歩しながら考えることは、自分は精一杯やって来たつもりだが、はたして世の中の為に汲みんなの為にどれだけお役に立ったであろうかということです」

功なり名を遂げた人の淡々と語ることばは飽くまでも謙虚なものがあった。永島氏の御宅近くの浜に今あがったばかりの漁船が網をつけていた。胴船に二十糎程のクジラ（鯨の子）が躍っていた。これがその日の酒のさかなになったとはいうまでもない。（O）

（写真は勝浦浜にて永島、吉武両氏）

勝浦の〝せいご〟

宗像伝説　その十三

宗像大社の手水鉢を新調したいという話が持ち上り、正月早々勝浦の永島計七氏と田島の吉武儀一郎氏、それに神社からは職員二名が同行した。勝浦の浜に大石があるというので調査に行ったのである。ところがその大石は砂に埋れていて、大潮の時に改めて掘り出すことにして帰路についた。

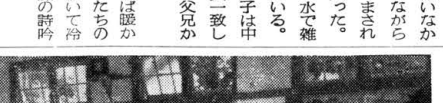
海岸を歩きながら永島氏が紫檀の杖で指さした。

「あれが塩浜の堤防です」

見ると、遠かに黒い堤防が見える。永島氏が話を続けた。以下がその要約である

「あの堤防は歴史的由緒のあるものです。戦国時代の弘治、永禄の頃から津屋崎と勝浦は漁場の争いをしていました。互いに譲らず、終には血の雨を降らしたと伝えられます。領主の宗像氏も苦慮した事と思われます。

約百年の後、寛永年間に漁場争いが再燃、今度は爆発的な騒ぎになりました。津屋崎三百戸の漁民、勝浦五十戸の漁民が対立した結果、時の黒田藩の浦奉行篠原勘右衛門の裁定がきまった。それが有名な津屋崎六人衆の話なのです。何でも数百貫からある石を六人の庄屋と組頭で担ぎ、行けるところまで行った所を漁場の境界とするという話なのです。当時の評議は大変なものだったでしょう。藤蔓でしばった大石を、津屋崎浦の死活の為に必死となって担ぎながら、あれ、あの堤防の所まで運んで来たのですね。あまり進むと勝浦の分が無くなる恐れがあるために、これを見かねた寒行刀で藤蔓を切って落したということです。それがずーっと江戸時代を通じての境界となったといわれます。しかし、その時の評議のもとになった者としてその六人衆は処刑されました。今その六人衆の墓が塩浜の向うにあります。毎年四月の八日でしたか、今でも追悼の



町村往来

公民館で実施

津屋崎小学校PTA研究会　20日午前9時から学習指導、親子常会、分科会、講評などがある。

大島村消防団出ぞめ式　5日大島小学校で分列行進、防火演習などがあったのち県消防協会から十年以上の永年勤続者の遠藤栄山子さんら二十四人、消防隊員金川猪走さんら五人、防火施設改善功労者丸井八五郎さん、防火思想宣伝功労者として大島小学校を表彰した。

宗像高校学級増加対策協議会　9日午後1時半、町村会館で本年度までに学級増加の実現について対策をねる。郡内町村長、議長、教育長中学校長らが出席。

宗像町選挙管理委員会　10日午後2時役場で検察審査員の候補者について。

野坂公民館落成式　14日午前10時、同分館は一百四十平方メートル、鉄筋コンクリートの平家建、集会室、会議室、事務室などの五室。

危険校舎を調査　県施設課は10日、玄海中学校と神湊小学校の古くて危険な校舎を調べる。

福間町給与所得者協議会囲碁大会　14日午前9時、福間町公民館。

津屋崎町青年研修生入所式　同町青年研修所では18日午前11時から同所で第三期青壮年研修生の入所式を行う。

福間町教育懇談会　18日午前10時、公民館で学校教育の方針などについて。教育委員、小中学校長、同PTA会長らが出席。

中央中学校耐寒訓練　16日―20日まで、午前7時55分から。35分間、学校付近を走る訓練を実施、最終日に全校マラソンをする。（西日本新聞より）

同郷の先輩 故中村盛夫様（元検事正）を想う

東京　永島潤

偶々中村さんが虎の門病院に入院中と聞き早々御見舞したのは確か十一月三日文化の日だったと思う。例の人なつこい温顔にて大変喜んで下さいました。

本紙宗像にも親しんでいられたらしく宗像会発起人会の事や福岡の兄弟の事など、又御互いは高血症でそのうえ天は二物を与えずとの喩え「カン」などとはおよそ無縁であろうなどと二人して勝手な事もあれこれと気まぐに語り合ったものです。三四日後には大手術をされる病人とはどうしても想われませんでした。

その内奥様が甥さんと一緒に見えられたのでおいとましましたが、これが中村さんとの永遠のお別れになろうとは……余りにも事正として御活躍、御多忙の内に名物のフク料理に、大に杯を傾けた事なども今となってはつかしい想い出となりました。

それから御互いに転々私が東京に転勤して来た時も会社の者が偶々出先きの大森公館役場にて中村さんに会いその私への事ごてが偶然に重なって大分市に復帰した時など、人一倍喜んでくれ、落成披露の会には色々と心配って頂きました。その温情など未だに忘れる事が出来ません。焼け跡も中村さんは大分地方検察庁の検事正として急造されたバラック建築の三重町の汚ない仮社屋にも立ち寄り感せずにはいられません。それから色々と激励して下さいましたをつくしていました。当時偶然にて

それから大分市中心街の焼跡に一ち早く当時としては目を惹いた社屋を新築し大分市に復帰したのです。想えば不思議な巡り合わせ因縁とでも言う外ありません。

中村さんには学生時代からの親友安永さん（八幡化学社長）を初め同郷内外に多くの知己関係者が有りましたが、特に故人の遺志にて御葬式など近親者のみでしめやかに営まれたとの事です。中村さんらしい人柄が偲ばれてなりません。今息方も皆りっぱに成人活躍されており又りっぱな孫者も沢山在京していられるので心残りなど何一つあろう筈なく、今ぞ悠々安らかに西方楽土に永眠されている事でしょう。

中村さんは所謂世に言う秀才とはおよそ縁遠く春風駘蕩、悠揚泰然として追らず全く心温まる温容の偉人でした。（三六・二・一二）

宗像郡教育界の草分け　安部みき刀自米寿祝賀会

現在宗像郡教育界の草分けともいうべき安部みきさん（現玄海町教育長安部健三氏母堂）が米寿を迎えられた。

新春一月二十一日、曽ての教え子等十数名が安部先生を招待、宗像大社に於て米寿奉告祭を斎行、終って社務所に於て祝賀会を行った。曽ての、といってもその頃は明治三十年前後、教え子等といっても今は七十余才の老人ばかりである。先生も生徒もシワだらけだが、師弟の愛情はそのシワよりも深い。

授業中に鎮国寺の山にナバ（蕈）取りに行って怒られた話や、算術の宿題が出来なくて一時間立たされた話などの幼い日の想い出が、今は唯懐しい語り草として一同の心を揺する。

神社からは特別授与品として「翁面」が贈呈された。終って祝前に於て安部先生を囲んで記念撮影が行われた。終始ニコニコと笑みをたたえられていた先生のお顔に一瞬感動の表情が見られた

尚当日の出席者は次の通り

福崎虎夫・小樋六衛・花田市蔵・山路虎夫　高橋昇・田中寿三・永島計七・永島金作・吉武源三郎・吉武儀市郎・安部武（写真は安部先生と曽孫さん）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社 大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

物質尊重より人間尊重へ（その三）

出光佐三

（前号につづく）あるいはまた自由を守ることから逸脱して、放埓、わがままとなり、他人の自由を侵し、日本でいう淳風美俗を害するようになる。これが人間のやることである。したがって、その結果は個人と個人が対立闘争するか、あるいは今の労働組合のように階級が対立闘争する。あるいは国家と国家が対立闘争する。さらに国家群が対立闘争するということになる。このように人間が矛盾性を発揮したときに、個人主義は対立闘争の区域から一歩も出ることはできない。対立闘争はとどまるところを知らず、混乱は限りなく続き、解決の方法も見いだしえないというのが現在の世界状勢である。

この対立闘争の姿も、昔のように一民族の間であれば何とか解決の道もあるが、現在のように交通がスピード化して、時間的に世界が狭くなり、この狭いところに百以上の異民族が雑居するようになった今日、対立闘争の思想は絶対に許されないものとなったのである。

日本伝統の無私の思想

さて、世界各国の歴史と同様に、日本にも武力、権力による力の征服はあった。それが覇者といわれ、将軍といわれたものであって、源平、北条、足利、徳川の幕府政治がそれであり、外国の皇帝、キング等々に相当するものである。しかしながら日本には、これらの覇者の上に皇室と国民とのつながりがあって、いかなる将軍、覇者も天皇のお許しなくして将軍たることはできなかった。国民が承知しなかった。

そして将軍の任務は国内の治安を維持し、人民の生命財産を保護することであった。天皇は将軍に対し国民保護の任務を授けられた。これが世界の歴史上、他に比類のない存在であり、そしてまたこの存在によって無私の思想が生まれたのである。

この無私の姿は遠く神に発しているのである。鈴木大拙先生のお話によれば、人間は水や鏡に己れの姿を写してこれが自分であることを知る。また善悪の区別を知っている。これが他の動物と異なる点である。人間天照大神は自ら姿を鏡にお写しになってこの鏡を自分と思え、とお訓しになったと先生は説かれている。ここに自分を離れて自分の善い姿を見るという無我無私の悟りをお授けになったのである。天照大神は天にまします神ではなくて実在の人間である。そしてこの無私の姿を実在の人間として継承されているのが歴代の天皇であって、こうした神、皇室の教えによって国民に無我無私の民族思想が醸成されたのである。日本民族も人間らしい私欲をもっているが、その反面に己れを離れて善良なる己れの姿を見うるところの無我無私の性格をもっているのである。神、皇室、国民と無私のつながりによる日本の国体が世界唯一のものであると同時に、無私の民族性もまた世界に唯一のものであるといいうるのである。もちろん、この無の思想は東洋的のものであり、仏教、儒教等々みなその教えであるが、その発祥の国の滅びるとともに、ほとんどその形は消えているが、日本に渡来して日本本来の無の思想を磨き上げるのに偉大なる役割をなして、日本の民族性に強くとり入れられ、大きな貢献をなし、宗教、道徳の中核をなしているのである。

こうした無私の国体の力によって、平和は限りなく続いて二千数百年の長きに及び、その間、死刑のなかった理想的な時代が、今から千年前にその前後四百数十年も続いたのである。こうして国民は皇室を中心として、これにすがって己れの生命財産に対する何らの不安もなく、安心して日々をお互いに仲よく楽しく暮らすという、まことに平穏な雰囲気の中に浸ってきた。互いに助けつ助けられつというような「お互い」という考えが次第に強化された。互譲とか、他人に対する義理人情をわきまえてお互いに迷惑をかけないことを知っている。お互いに信頼して融和するとか、そうして全体が一致団結するという民族性が出来上がり、この団結の偉大なる力が外敵を防ぐにも強く、国内をいよいよ幸福ならしめて、国民は己れの生命財産に安心して、ひたすら国家全体の幸福を思う無私の悟りを学ぶようになった。しぜんと敬神の念は起こり、皇室、国体の尊厳を信ずるようになったのである。

無私といっても、現在の大衆ははっきり理解もできず説明することもむずかしいこととなっているのであるが、数千年来、祖先が身をもって実行している間に、無私の血液は体内に濃く流れて日本民族性となっている。知らず知らずの間に、大衆は日々の行動に無私の姿を顕わしているのである。親切という一事をとりあげても何らの報酬を求めない親切、他人の立場を尊重する考えから出た義理人情、互譲互助等あらゆる道徳がそれである。この無私の尊さが理解されれば、忠ということや、孝が百行の基であることなどがはっきりしてきます。

無私に根ざす日本人の全体主義

こうした神の教えによる無私の思想から国民の道徳は生まれ、互譲互助とか義理人情とかいう温かい精神によってお互いに信頼融和し一致団結して、日々を仲よく楽しく暮らした。それが二千数百年の長き平和の歴史をつくり、伝統は生まれ、いろいろな制度も出来た。この中で家族制度は最もすぐれたるものである。

かくして己れを離れて全体をつくるという悟りを会得した。これが現在では日本の全体主義と言われているものであって、何も全体主義という主義主張から出たものでもなく、これを実行に移したものでもない。皇室を中心として仲よく暮らしてきたという事実そのものであって、無私の考えの正しいことを物語っているにすぎない。二千年も経ってから勝手に全体主義と名づけているにすぎないので、われわれ日本人には関係のない名称である。しかもこの名が悪用されているにいたっては、日本人としてはまことに迷惑極まる次第であります。（以下次号）

『あゝ八波則吉先生』（二）

難波江通泰

文治二年秋八月、六十九歳の老法師西行は「命なりけり」と、さやの中山を越えて鎌倉に入り、十五日鶴岡八幡宮参拝中を征夷大将軍源頼朝に発見せられてその館に招き入れられ、歌道及び弓馬兵法の講義を求められた。西行答へて「先祖俵藤太秀卿より九代相伝の兵法は、出家と同時に焼き払ひ、詠歌も亦、何ものも持ち合はしませぬ」と謙虚にその請を辞退した。しかし頼朝は礼を尽して懇望した為に、西行も、それではと弓馬兵法の縕奥を語り初める。折しも八月十五日仲秋の明月、西行にとっては否、四十数年前当時二十三の若き北面の武士、左兵衛尉佐藤義清にとっては、この明月こそは、非恋失意のあまり、かこち顔なる泪で「月やは物を思はする」と嘆きつつ出家の道へと歩ましめたその明月なのである。今、西行老法師は四十数年後、同じ八月十五夜、源氏の大将軍、源頼朝に向って講ずるは、歌道ならずして事もあらうか弓馬兵法である。頼朝はいたく感激して別るるに銀作りの猫を贈った。しかし行雲流水の老法師は鎌倉殿を辞するや、門前に戯れてゐた児童にその銀の猫を与へ、秋風に袖うち靡かせて白河の関を越え、四年後の建久二年、そのきさらぎの望月の頃、花の下に世を去った。西行、年少気鋭の清純なる気魄は、老骨のその最期まで剛壮典雅を失はず、遂に天下に号令する頼朝鎌倉殿ですらこれを屈し得なかった。

八波則吉先生は明治九年三月一日、上西郷内殿に生れ、明治三十一年九月東京文科大学国文科に入学せられた。時に二十三歳（西行失意の出家も二十三歳）であった。而して先生二十歳代の歌が

この花に縅して育けんそのかみの若武者ゆかし垣の卯の花

などの剛壮優雅なる古武士の姿であった。やがて年は移って昭和となり、先生は国文学者として功成り名遂げての晩年閑居も大東亜戦争の為に寧日なく、昭和二十年七月十一日、熊本戦災により先生の邸宅も多年収蔵の貴重なる蔵書も、一切が灰燼と帰し、難を宅裏の川中に避けられた先生の両眼は濁水の為に明を失はれた。時に先生七十歳であった。しかし、先生少壮の際の気魄は、五十年後非常の災厄を敢然撃退せられた。即ち、米軍数百機の猛爆も遂に先生を屈し得なかったのである。先生は戦後昭和二十八年、七十八才にして歿せられる迄の八年間は、故山宗像の郷に日を送られたが、その一端を幸に織田橡雨翁が本紙第七号に伝へられた。すなはち橡雨翁に先生は「既往語るに足らず。我には母より享けたる無形の尊き遺産あり。他なし、敬神崇祖の精神遺産なり」と微笑されたといふ。先生の母堂は天神（菅公）崇敬の温良なる婦人で、この母堂の感化を幼少より受けられた先生の魂魄は、七十年後の苦難の際に恰も配所に於ける菅公の如き境遇にあって燦然と輝いたのである。

先生は遺詠に

「恩賜の御衣今此処に在り
捧持して毎日餘香を拝す
ああ此漢詩を読む毎に、此漢詩を聞く度に、恩賜の御衣を捧持して、君恩に泣く菅公の、至誠の情に動かされ、誰か涙を落さざる」

と詠まれ、幼き日の母の感化は、遂に富貴も貧賤も威武も屈し得なかった。

「かたじけなさに涙こぼるる」と伊勢神宮に国体の血潮に泣いたのは剛壮の西行であった。至誠国体護持の菅公を仰慕されたのは八波先生母子であった。西行はしばらく措き、八波先生の剛壮敬虔は母の感化にこれを見る。あゝ今日我国の乱世混迷を救ふは、ここ宗像の郷に流れる父祖伝来の血潮をうけて起つ人々でなければならぬであらう。（原文のまま）

成人の日の思い出

大島 福崎靖生

私は中学校を卒業すると、すぐに漁業に従事し今日に至りました。

漁業の仕事も殆んどの事を一応経験しました。その中で一番多く経験した事は沖ノ島での漁業で思い出もまたそこにあるわけです。

私が沖ノ島に行くようになってから早や六年間が過ぎました。その六年間も今思い出せば早く過ぎたようですが、一人静かに考えるとき、いろ〳〵の事が次々に思い浮んできます。

厳しい玄海の冬、手も体も凍るような北の風、舞い狂う粉雪が、しぶきと共に全身にたゝきつける時、玄海のたゞ中で完全に視界をさえぎられてしまう。大風、大波におそわれ船は波を打ち込まれ転覆寸前の危機に、目的地に行く事も又引き返すことも出来ぬこともありました。

このような体験により、私は体を、心を鍛えられ、社会人として生きるための厳しさをつく〴〵知りました。

こうして私が沖ノ島に出漁している四年目のことです。

或る時ブリを積んで大島に帰った時、友達から「成人祭の案内が来ているぞ、十五日は必らず帰って来い」と聞いて、私はどうしたらよいかと迷いました。家に帰ると両親も困っているようでした。ブリを市場に売って、またすぐ沖ノ島に行きました。早速、寒い海との戦いが始まりました。しかしブリを釣りながらも色々と考えました。私は「十五日はジャンパーでよい」といったものの眠る時にデッキを開けて月をじっと見つめていると、成人祭の事が気になって来ました。もういよ〳〵明日になった成人祭の事が――。

友達が背広を着、靴をはき、きちんとした立派な姿をしている。その中にジャンパーを着ている自分の姿を思い浮べると、自分で自分が可哀そうになり、私は胸が一杯で……これも私のひがみだろうか!!

〃いっそのこと、明日は大島に帰るまい、帰らなければつらい思いをしなくてすむ〃私は船頭さんに「明日は大島に帰らないでよい」と申し出ました。しかし船頭さんは「一生一度の祭りだ」といわれ朝早く船を出してやる気持のようでした。船頭さんの立場はよく分る。しかし、私はどうしても帰りたくないので、私は思い切って胸の中を船頭さんに打ち明けました。船頭さんも私の気持をやっと分ってくれました。

早く眠らぬと明日の仕事にさしつかえると、あせりながらも十五日の朝がついに来ました。私は朝めしを炊きに起き上りました。すると、船頭さんが先に起きて飯を炊きあげ、くろいお茶づけを作り、もう私が食べられるばかりになっていました。「大島でお祝が出来ないが、これがお前の成人のお祝いだ」と言われた時、私は胸が一杯になりました。感謝とうれしさで、何を食べているのやら分りませんでした。

食事が終ってまだ明けぬ五時頃、沖に出て漁を始めたが悪天候のため船頭さんが「おい今から大島に帰るぞ」と言われました。私は心の中で思いました。大島まで四時間、丁度祭りはもうすんでいる、安心だと。船は大島に向って船脚を早め昼一寸前に大島の波止の沖まで来ると、中津宮様には国旗が立っていました。又母校の貴船ケ丘にも旗がひらめいているのが目につきました。

旗を仰いでいると、今迄の苦しさや、つらさもうすれてゆきました。「あゝ今日から自分も一人前だ、しっかりしなければ」と心に誓いました。

私は船頭さん達よりも早く上陸して家に急ぎました。丁度公民館の前を通りかかると、祭りの後の式が終ったばかりで、中から出て来る友達にばったりと出合いました。私は〃しまった〃と思ったが、しかしもう遅かった。同級生は皆立派な背広を着込んで見ちがえる様になっていた。私はそれを見た時「やっぱり遅れてよかった」とつく〴〵思いました。

そして、ひとりでに瞼があつくなり、涙で前が見えなくなりました。みんな後から歩いて来る。走って帰ろうかと思ったが前にも何人かいる。一週間も沖ノ島でよごれた仕事着をきて、髪は長く伸び、疲れた自分のすがた――みすぼらしさ…落ちる涙を知らぬふりで歩き、物影になったとき、くちゃ〳〵に目をこすりました。この胸の中…痛くもかゆくもないのに涙がこぼれてくる。これが男泣きというものだろうか!!

× × ×

そして夜は同窓会である。私は気がひけたが思い切って出席した。するとみんなは気持よく迎えてくれました。先生や同級生から「なぜ早く帰らなかったか」と聞かれた時、何と言ってよいやら「時化で帰りが遅くなった」とつい嘘を言ってしまいました。

そして楽しく、にぎやかに夜はふけていきました。船頭さんは「ゆっくりして来い」と言われたが、私は夜中の三時にブリを積んで神湊の朝売りに行きました。後で聞くと友達は朝の七時まで語りあったとの事でした。

私は成人祭をつく〴〵思います。この成人祭のつらさ…そして、うれしさ…私にとっては一生忘れる事が出来ないであろう……

そして、やがて来る弟の成人祭には人なみの立派な楽しい成人祭を迎えさせたい。

稲元の経筒について

滝口正

明治三十五年十月一日滝口恵吉監督の下に氏神八幡宮西側の急坂工事中、地下一米突のところで鶴嘴に異様な手応えがして炭の破片が現われた。砂留与市、中島角造の両人は不思議な霊感に打たれ乍ら注意周到に難なく珍らしい経筒を掘り上げたのだった。

早速隣接の萬福寺住職、今任卍童師に鑑定を求めた。

総高四四糎、口径一一、四糎、滑石製で筒身、蓋、宝珠の三部からなり下部には台座にはめ込こむように造り出しがあるが、台座は発見されなかった。筒身をめぐって銘文が刻んであり仁平四年九月二十三日、白衣弟子綾清宗並紀氏敬白、奉如法書写妙法蓮壱部八巻、現世安穏後世菩提供養為など刻まれて居た。異様な音響は蓋を二枚に裂いて居たのだったが幸い大した傷でなかった。「希望者があったら酒一升で譲るぞ」然し興味を持つ人はなく寧ろ障らぬ神様に祟りなしで其措置に困った揚句、中谷共有として観音堂祭壇の片隅に預ける事となり埃にまみれ放置状態のまゝ不思議にも無難で三十年の月日は流れたのだった

昭和七年氏神裏山の一本松（筆の字さながらで筆松と呼んで居た）が先年の落雷で傷つき遂に枯れたので私、区議に謀り同材で拝殿を拡張することになりその厚板で大工、忠作氏へ頼み格納箱を作って経筒を安置した。

其後福岡県文化材保護委員会に認められ昭和十三年六月突然経筒鑑定の通達があり時に田植直前のこと区長滝口栄造に代り仝姓健吾、同博両人が持参上京し明けて十四年八月八日附で国宝に指定返送されたのだった。国宝の資格になれば当然保管庫の条件が附けられ規定の補助も受けられるが第一適当な場所がなく非常戦時でもあり取り敢へず区長預りとして居た。

遇々宗像高等女学校の田中教諭が文化財の保護に熱中奔走され遂に宗像郷土舘が成就した際だったので同氏の懇望で舘内に陳列することになった。

その後、支那事変は大東亜戦に拡大し更に内地も空襲に脅かされるようになったので区長博は経筒を引取り納屋の奥に避難させたのだった。

偖終戦後これら夥しい重要文化財の再整理が叫ばれ再鑑定の新国宝と名付けて名実共に貫禄を示すことになった。

昭和二十八年九月四日福岡県文化財課、波多江技官の案内で東京都麻生、上野公園国立博物館内、文化課嘱託文化財保護委員会の技官保坂三郎氏が宗像神社及び稲元の経筒鑑定に来られた。其の際宗像町では薄町長の懇請で山田増福院の宝物鑑定もあり私も随行した。偖稲元の経筒は区長宅で謹厳に再鑑定され刻まれた経文は入念に写し撮られた。二つに離れた蓋の修理については東京の専門家にやらせる早速同類の滑石を取り寄せ至急手続を取るよう一切を波多江氏へ指導された。

其際経筒としては目下但馬の出土品と稲元の経筒の何れを先に指定するかに絞られて居り何れ劣らぬ逸品で技術面では稲元が勝り年代では但馬がずっと古いと話されて居た。尚宝珠の工夫、勾配の線美、入魂の刻字、名残り惜しそうに暫く撫でて居られた。

そして区長滝口達平は直に若杉から滑石を取り寄せ一切を波多江技官へ依頼されたのだった。斯くて翌年返送された経筒は見事に蓋も自然を保ち台座には木製の蓮華があしらわれ上質の桐箱に丁重に絹に包んで納めてあった。越えて昭和三十二年六月波多江氏を通じ京都博物館より経筒陳列が所望され向う三ケ年の契約で稲元は承諾した。同年十月開館六十周記念には招かれて区長滝口三夫氏同伴式典に参列した。

出品二七六点、主に平安時代の逸品を網羅し中に経筒は僅二点で一つは岡山勝福寺蔵の土製宝塔（瓦経一九二枚外法華経の題簽を書いた土製品と一緒に埋めてあったもの）であった。

その翌年京都博物館は全国有名都市で美術展を公開（福岡はスポーツセンター）した。

目下稲元経筒は京都博物館の懇望で更に三カ年延長再契約中である。